

第1回：大庭の名前の由来 発展と歴史

まず藤沢地名の会の紹介をさせていただきます。

設立は35年前で、当時藤沢市の事業として藤沢市内の地名調査が行われましたが、それにボランティアとして参加した有志によって結成されました。会の目的はちょっと長いのですが、「藤沢市の地名を通して、藤沢の歴史・地理・民俗・考古を調べ、後世に伝え、ふるさと意識の啓発を図るとともに、地域文化の創造に資すること」とあります。

以来この目的を果たすべく、先輩から代々引き継ぎ、藤沢市の後援を受けて活動を続けてきています。現在の会員は約160名で様々な事業活動を行っています。関心のある方は是非お問い合わせください。

続いて本題に入ります。まず **大庭の地名の由来** です。

大庭という地名は大変古く、平安時代に書かれた古文書「倭名類聚抄（ワミョウルイジュショウ）」の中にも出ています。大きな庭と書く「ニワ」は 古代には神祀りをする神聖な空間を指す言葉とされています。藤沢市史では、広大な平坦地の意味に因む、とされています。

大庭内の個々の地名も少しご紹介したいと思います。歴史・伝承を由来としたものが多いのが特徴です。最初に地名、続いてその意味を説明します。

有藤（うとう）	： 稲荷堰でせき止めた水を、「ウト」と呼ばれる小路を通して茅ヶ崎市赤羽根に落としたと伝えられています。
裏門	： 大庭城の裏門。
隠里（かくれざと）	： 大庭景親以来、江戸時代の初めまで大庭の領主が住んでいた館があったと云われます。
駒寄（こまよせ）	： 大庭景親が遠藤にある大瀬戸稲荷に参拝するために、馬を清めた所と云われます。
城山	： 大庭城址公園のある所、お城があった山ということ。
台谷（だいやと）	： 台地と谷戸（やと）で構成された土地という意味。
城下（たてした）	： 先ほどの隠里の東。
築山（つきやま）	： 北条早雲が大庭城を攻める時、弓矢が届かなかったので、一晩で山を築いたとされる伝承があります。
二番構 （にばんがまえ）	： 構（かまえ）とは、壕（ほり）や土塁を構えた武家・豪族の屋敷のことで、城郭に関係する防衛ラインのこと。遠藤に一番構があったとも云われています。
聖ヶ谷 （ひじりがやと）	： 北条時頼が聖福寺（しょうふくじ）を創建した地とか諸説あります。

きりがないのでこの辺で切り上げます。

次に大庭はどのように発展してきたのか、要約した**歴史**をご紹介します。

大庭地域で人が生活を始めたのは、約2万3千年前のこととされています。有史以前の遺跡、即ち旧石器・縄文・弥生・古墳時代の遺跡が複数発見されています。続いて律令時代には、当地は“大庭郷”という名の行政対象地区であったとされています。つまり当地は住みやすく、早くから人が居住してきた土地と思われます。

平安時代末に、有名な武士・鎌倉権五郎景正が 藤沢市南部から茅ヶ崎市に渡る広大な荘園を拓きます。その名前は**大庭御厨**といいますが、当地はその“本郷”即ち最初の耕地開墾が始まった地とされています。大庭御厨は3百年以上存続しましたが、戦国時代になって守護大名・扇谷上杉氏の領地に組み込まれ、有名な太田道灌によって大庭城が築城されたと云われています。そして、これも又有名な北条早雲（伊勢宗瑞）と、この城を巡って攻防戦が行われ、舟地蔵などの伝説が生まれました。暫らくの間ですが、当地は城下町でもあったわけです。

江戸時代になり大庭城は廃城となり、幕府領として複数の旗本の知行地となります。人々は新田の開墾・改良に努め、つい数十年前までは**大庭千石**と呼ばれる、比較的豊かな農村でした。大庭千石とは、米の収穫量が毎年千石ということで藤沢市内随一でした。

一方では藤沢宿に近い位置ですが、のんびりした純農村であったようです。それが、1970年代に藤沢市によって、耕地と周辺の山林を中心として**湘南ライフタウン**が開発され、様変わりして今に至っています。ちなみに、人口は一気に1,400人から32,000人へ増え今に至っています。



大庭の田園風景